【別添１】

３５	山口大学教育学部附属山口小学校	H30～R４

令和４年度研究開発実施報告書（要約）

１　研究開発課題

価値の創出と受容，転移をコアにした教科融合カリキュラムの開発
～「創る科」の創設を通して～

本研究の目的は，大きく次の２つである。２０３０年の社会を生き抜くために必要な力の育成と国の課題であるカリキュラム・オーバーロードの解消である。

子供たちが社会で活躍する２０３０年の社会は，急激な変化に伴い，予測困難な時代となることが予想されている。このような社会の中で求められる資質・能力はどのような力であろうか。小学校学習指導要領解説総則編では，「教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される力」や「今後の社会の在り方を踏まえて，子供たちが現代的な諸課題に対応できるようになるために必要な力」の必要性が述べられている。そこで，２０３０年の社会を生き抜くために必要な力を育む教育を探ることとした。

また，カリキュラム・オーバーロードとは，カリキュラムの過積載，つまり，カリキュラムの内容が過多になっている状態のことであり，学校や教師，子供に過大な負担がかかっている状態として捉えられている。このことによって学びが子供にとって「浅い」ものとなり，本質的な理解に至らないままに学習を終えてしまう可能性さえあるとされている。Less is more（少なく教えて豊かに学ぶこと）を原理とし，各教科等の時数を削減しながらも学びの質を向上させることで豊かな学びを実現することが求められている。

２　研究の概要（別紙１：研究の概要図）

本研究の実施に当たって，子供が少ない時数で豊かに学ぶことができるようにしたいと考える。そのためには，子供が価値や各教科等の本質（見方・考え方）を学習場面や生活場面において自在に使いこなすことができる資質・能力が必要である。つまり，子供が価値や本質（見方・考え方）を自覚して自発的に使えるようにすることこそが，本研究の核になる。各教科等の学習では，各教科等の本質（見方・考え方）の創出と受容，転移を促すことによって，３つの資質・能力（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）を育む。新たな教科として創設した「創る科」の学習では，価値の創出と受容，転移を促すことによって，「汎用的スキル」を育む。「汎用的スキル」を育むことは，各教科等の学びを促進させると考える。

３　研究の目的と仮説等

（１）研究仮説

本研究では，各教科等の本質（見方・考え方）と新教科「創る科」の価値，この両者の創出と受容，転移を促すことによる有機的なつながり，つまり，融合を意図的に行うことによって，Less is more（少なく教えて豊かに学ぶこと）を実現しようとしている。各教科等の内容や時数を削減したとしても，各教科等の本質（見方・考え方）を重視することや，「創る科」を創設し価値を学習内容として直接扱うことが，豊かに学ぶ子供の姿につながることを，教科融合カリキュラムの開発や創出と受容，転移の学習過程，子供の姿を軸にした教育効果の測定等の角度から検証していく。また，新たな教科として創設した「創

る科」は，子供が２０３０年の社会を生き抜くために必要な資質・能力を育成することに大きく関わるものであると考える。

（２）教育課程の特例

・新教科「創る科」の創設
・目標；価値を創出と受容，転移させる学習を通して，よりよく生きるための基盤となる汎用的スキルを養う。
・内容；具体化・抽象化する力，比較する力，他者に伝える力，問題を見出す力，情報を収集・処理する力，関連付ける力，批判的思考力，先を見通す力
・各教科等の学びを加速させることで削減できる時数を「創る科」の時間として扱う。

４　研究内容

（１）教育課程の内容

各教科等の学習では，本質を見方・考え方と設定し，授業づくりを行っている。見方・考え方は周知のとおり，各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであるとされている。各教科等の本質（見方・考え方）を創出と受容，転移させる学習をとおして，「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力等」，「学びに向かう力・人間性等」を育む。教科ごとに，各教科等の本質（見方・考え方）を子供の言葉や姿を基に整理している。「各教科等の本質（見方・考え方）～子供の言葉と姿～一覧」を表１に示す。また，「創る科」の学習で扱う価値との関わりについても意識して指導に当たることで，各教科等を豊かに学んでいくことができるようにする。この豊かな学びが，子供の学習を加速させていく。

表１　「各教科等の本質（見方・考え方）～子供の言葉と姿～　一覧」

国語	**○言葉の意味** ・○○という意味　・リズムや響きがよい ・過去のこと、今のことを表している ・意見や考えを表している ・昔の言葉と現代の言葉		**○言葉の働き** ・気持ちが分かる ・想像できる ・分かりやすい ・人に伝える ・人とつながる	**○言葉の使い方** ・読み手を意識して書く ・聞き手を意識して話す ・書き手の工夫が分かった ・話し手の工夫が分かった
社会	**○位置や空間的な広がり** ・広がっている・集まっている・広がり・位置・分布・地形・環境・気候・範囲・地域	**○時期や時間の経過** ・変わってきた・始まった・続いている・時代・由来・変化・発展・継承・持続可能・グローバル化	**○事象や人々の相互関係** ・つながり・関係・関連・協力・工夫・努力・願い・関わり・連携・対策・役割・影響	
算数	**○単位・基準** ・基準を揃える ・まとまり　・位 ・一つ分　・１とすると ・１あたり　・もと	**○集合** ・（性質、形が）同じ、違う　・仲間　・分ける ・広げる	**○表現** ・具体物、数・式、図、表、操作、グラフで表す ・表現を変換する ・表現の意味を考える	**○関数の考え** ・きまり ・変化と対応 ・比例 ・反比例
理科	**○量・関係（物）** ・数　・大きさ　・重さ ・強さ　・長さ　・体積 ・ふやすと…／へらすと… ・～したから…だ ・～が原因で	**○質・実体（化）** ・～だとしたら（例え） ・～なら…といえるね ・ものの性質　・ものの存在 ・ものの様子　・イメージ図	**○共通性・多様性（生）** ・同じ　・ちがう ・仲間　・グループ分け ・大きな決まり　・個々の特徴 ・～（視点）で見ると同じ／違う	**○時間・空間（地）** ・時間が経ったら… ・これから…　・前は… ・位置関係　・循環 ・図

また，新たな教科として「創る科」を創設した。創る科の目標は，「価値を創出と受容，転移させる学習を通して，よりよく生きるための基盤となる汎用的スキルを養う。」としている。「汎用的スキル」を育むために，週あたり１時間程度（年間 35 時間程度）の時数を配当し，

価値を学習内容として直接扱っている。教材については，各教科等の文脈によらないよう独自で開発している。創る科の学習をとおして，子供は，それぞれの価値についてしっかりと考え，その意味や方法を学ぶ。「創る科」の学習を積み重ねることで，「創る科」で学んだ価値を自在に使いこなし，自ら主体的に学びに向かうことができる子供を育む。

「創る科」の学習で学習内容として直接扱う価値については，表２のとおりである。１～４年生では７つ，５・６年生では６つと発達段階によって分けているが，全学年で８つの価値を意識し，系統的に学習指導を行う。

表２　「創る科」で扱う価値

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
具体化・抽象化する力	○	○	○	○	―	―
比較する力	○	○	○	○	―	―
批判的思考力	―	―	―	―	○	○
問題を見出す力	○	○	○	○	○	○
情報を収集・処理する力	○	○	○	○	○	○
関連付ける力	○	○	○	○	○	○
他者に伝える力	○	○	○	○	○	○
先を見通す力	○	○	○	○	○	○

また，「創る科」のそれぞれの価値については，系統的に指導できるよう，２学年ごとに目指す具体的な子供の姿を明確にし，内容を構成した。内容構成を以下に示す。

A　具体化・抽象化する力

〔第１学年及び第２学年〕

対象についての具体例を挙げること。

〔第３学年及び第４学年〕

目的や場面，状況に応じて，具体例を挙げ，要素に分けたり，法則を挙げ，一つにまとめたりすること。

B　比較する力

〔第１学年及び第２学年〕

視点をそろえて比べること。

〔第３学年及び第４学年〕

目的や場面，状況に応じて，視点を決めて共通点や相違点を見出すこと。

C　他者に伝える力

〔第１学年及び第２学年〕

相手の立場に立って，適切な情報量で他者に伝えようとすること。

〔第３学年及び第４学年〕

相手や目的，場面，状況に応じて，表現の仕方を選択し，他者に伝えること。

〔第５学年及び第６学年〕

よりよい結果のために，目的や場面，状況に応じて，言語や視覚資料などを組み合わせながら，分かりやすい表現の仕方を選択すること。

D　問題を見出す力

〔第１学年及び第２学年〕

不足した状況から問題を見つけること。

〔第３学年及び第４学年〕

「望ましい状態」を想像し，「現在の状況」に対する問題を見出すこと。

〔第５学年及び第６学年〕

よりよい結果を思い描き，現状と比較して問題意識をもつこと。

Ｅ　情報を収集・処理する力

〔第１学年及び第２学年〕

調べる目的によって情報を集める方法が異なることに気付いたり，集めた情報を分かりやすく整理する方法を考えたりすること。

〔第３学年及び第４学年〕

それぞれの方法の特徴やよさを生かして，速く正確に情報を収集・処理する方法を選び，解決すること。

〔第５学年及び第６学年〕

よりよい判断のために，それぞれの方法の特徴やよさを生かして，情報収集・処理する方法を正しく選んだり，組み合わせたりすること。

Ｆ　関連付ける力

〔第１学年及び第２学年〕

思考する際，自らの経験や知識とつなげて関係を見出すこと。

〔第３学年及び第４学年〕

経験や知識とつなげて考え，対象を増やしたり関係を整理したりすること。

〔第５学年及び第６学年〕

よりよい判断のために，様々な経験や知識をつなげて対象や概念を増やしたり，関係を整理したりすること。

Ｇ　批判的思考力

〔第５学年及び第６学年〕

よりよい判断のために，様々な観点に着目して事象を捉え，多面的，多角的に考えること。

Ｈ　先を見通す力

〔第１学年及び第２学年〕

見たり聞いたりしたことをもとに，これから起こりそうなことを考えること。

〔第３学年及び第４学年〕

経験や知識をもとに，先に起こることを予想し，適切に判断すること。

〔第５学年及び第６学年〕

よりよい結果に向かって，経験や知識をもとに，適切に判断したり実行したりすること。

評価方法としては，「創る科」で育む汎用的スキルが成長目標であることを鑑み，記述式による評価を採用している。子供の「創る科」ノートの振り返りの記述から，子供の学習状況や成長の様子を個人内評価として見取り，通知票に記述することとしている。「創る科」ノートの振り返りの記述例（図１）を以下に示す。

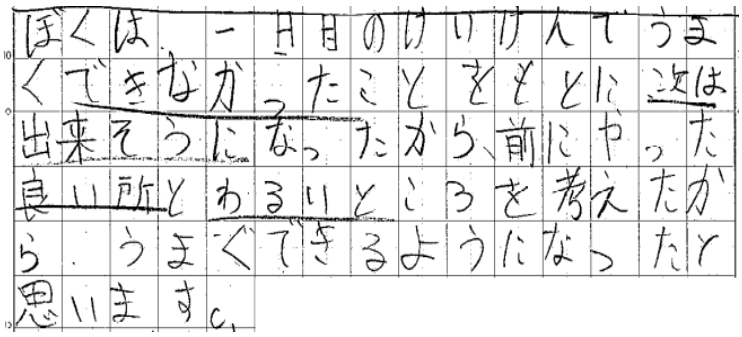
ぼくは、一日目のけりけんでうまくできなかったことをもとに次は出来そうになったから、前にやった良い所とわるいところを考えたからうまくできるようになったと思います。

図１　「創る科」ノートの振り返りの記述（５年生　先を見通す力）

子供への励ましや次への意欲につなげるための評価という側面だけでなく，それぞれの価値について考えたことや意味，方法を重点的に見取ることで，子供が「創る科」で学んだ価値を各教科等の学習や日常生活に転移させていくことができるよう指導にも生かしている。また，「創る科」の学びの足跡を掲示し，学習や日常生活の中で活用する等，明示的に指導している。掲示の内容としては，８の価値についての子供の学びを蓄積している。各学級の背面掲示の中から一例を図２に示す。

図２　「創る科の学びの足跡（掲示）

本研究では，「創る科」の学習で扱う価値と各教科等の学習とが質的に融合することをねらっているため，質的な融合を教育課程の編成原理とし，教科融合カリキュラムの開発と編成に取り組んでいる。本校では，教科融合カリキュラムを「各教科等の学習を本質（見方・考え方）で整理し，「創る科」の学習で育む価値を教科等横断的な視点として編成したカリキュラム」と定義付けた。各教科等の学習を本質（見方・考え方）で整理し，「創る科」の学習で育む価値で各教科等をつないでいくという，縦軸と横軸のイメージで編成している。カリキュラム編成イメージ図（図３）を示す。

「各教科等の学習を見方・考え方で整理する」という視点で，単元や学習内容をつなぎ，各教科等で単元配列表を編成している。その際，県内外の大学，教育委員会，附属小学校，公立小学校の教員をカリキュラム・アドバイザーとして招き，２年間（年３回）にわたり，カリキュラム編成会議を行った。各教科等の本質（見方・考え方）や，単元のつながりなどについて協議し，単元配列表に反映し，運用している。図４のとおり，各教科等の単元配列表には，単元ごとに中心的な本質（見方・考え方）や，創る科で扱う８の価値の中で関連が強いと考える

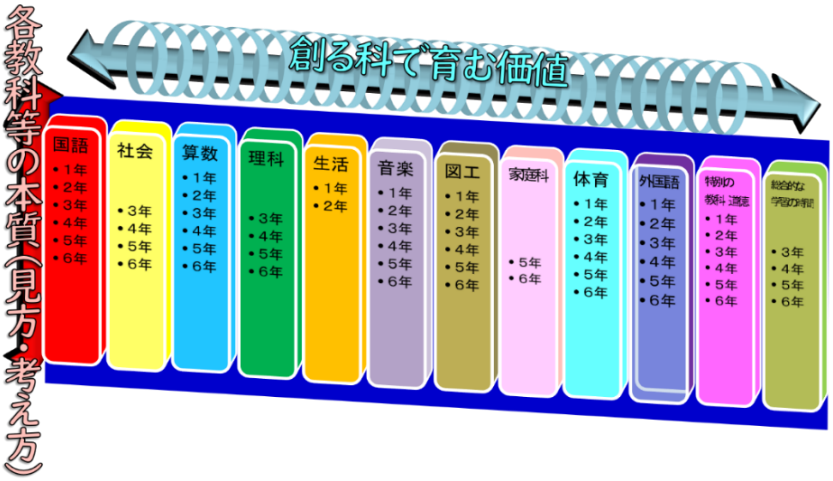

図３　教科融合カリキュラム編成イメージ図

「価値」を記入した。

各教科等で作成した単元配列表と「創る科」で扱う８の価値を教科横断的な視点としてつなぎ，「創る科」を含む学年別年間指導計画を編成している。「創る科」を含む学年別年間指導計画を作成する際に，各学年部と教科部とで連携し，

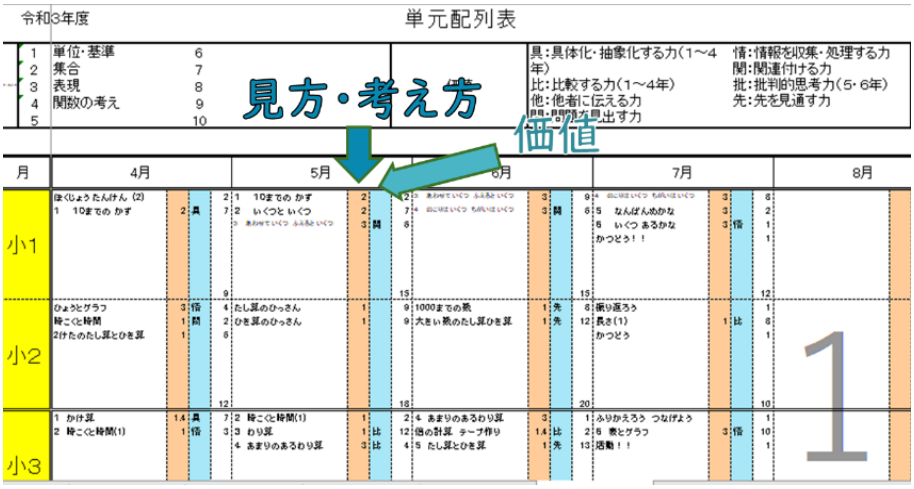

図４　単元配列表

価値に合わせて各教科等の単元配列を入れ替えたり，「創る科」の単元計画を設定したりしている。そうすることで，各教科等の学習と「創る科」の学習が有機的に融合し，時数を減らしながらも子供が豊かに学ぶことができるカリキュラムを編成している。

本校では，以上のような編成方法を基に，教科融合カリキュラムを編成している。令和３年度に編成したカリキュラムは令和４年度に実際に運用し，評価・改善を図っている。また，令和４年度に，令和５年度のカリキュラムを編成し，次年度運用する予定である。

（２）研究の経過

	実施内容等
第一年次	各教科等において育まれる資質･能力及び各教科等の学習内容の抽出と相互の関連性，順序性の整理を行う。各教科等の授業時数等を見直し，新たな教科「創る科」の設置に向けた準備，教科内容の検討を進める一方，一部授業内容を先行実施する。
第二年次	「創る科」を試行し，その学習内容や評価に関する検討を実施する。特に，授業実践を通して，「創出と受容，転移」を行う一連の子供の姿を明らかにし，その姿から価値を検討する。「創る科」の授業形態について検討する。
第三年次	「創る科」の実施をもとに，その意義や教育的効果について，外部有識者等を交えて検証し，教育課程や指導方法，教材についての見直しを行う。教科融合カリキュラムの作成に取り組む。「創る科」においては価値を，各教科等においては本質（見方・考え方）を創出と受容，転移させる授業づくりに取り組み，その有効性について検討する。「創る科」の評価規準を策定する。
第四年次	「創出と受容，転移」をコアとした教育課程の編成とその効果について総合的に検証する。教育上の意義や効果については，「価値の創出と受容，転移」を，教科として取り入れたことによる子供の変容を中心に検討し課題についても整理する。教育課程編成と指導上の留意点等については，具体的な教材や評価の観点等も含め，一般化を前提に検討，整理を行う。

（３）評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	「創る科」を想定した「価値の創出と受容，転移」に関わる内容構成について量的・質的な観点から評価を実施する。実際には，「創る科」に関わる教材やその実効性などを運営指導委員会などにおいて評価する（年度末）。また，先行実施した授業実践の学習活動の評価（自己評価，学習者相互評価及び教師評価）について試行し，学習評価指標策定を試みる。
第二年次	小学校における「創る科」の授業実施について量的・質的な観点から評価を実施する。具体的には，本研究に関わる運営指導委員会において「創る科」に関わる研究授業などを踏まえた評価を行う。自己評価や学習者相互評価及び教師評価については，前年度の評価指標を用いて継続的に実施する。
第三年次	前年に引き続き，「創る科」の実施を基にした子供の自己評価や学習者相互評価及び教師評価を行う。学年進行に基づいて子供の意識や態度がどう変容したのかについて，重点的に評価，検討を行う。各教科等の融合については，カリキュラム・マネジメントの観点から有効性を検証する。
第四年次	教科融合カリキュラムなどを運営指導委員会において量的，質的な観点から評価する。子供の学習状況を通知票に記述する。参観日に創る科の授業を公開し，直後にアンケートをとることで，保護者に評価を求める。「創る科」の内容構成が，子供の発達段階や学校教育課程に照らして適切であったかどうかについて，運営指導委員などを含め，総合的に評価，検討する。

５　研究開発の成果

（１）実施による効果

子供，教師，保護者それぞれに対して効果があることが分かった。

まずは，子供に対する効果についてである。創る科の学習を数年積み重ねたことによって価値が子供にとって身近なものになった。本校では朝の時間にフリートークを行っている。その話合いの中で，学年を問わず，子供が「創る科の学習でやったように」や「批判的思考力を使って」のように，創る科で扱う価値について語る姿が多く見られるようになった。また，各教科等の学習で，価値についての発言も見られるようになり，創る科と各教科等の学習が子供にとって密接なものであり，往還していることが分かった。子供は，自らがどのように思考しているのかを，立ち止まって考えているのであろう。これらの子供の姿から友だちとのかかわりや自分たちの学びを俯瞰して捉えるようになったことが言える。このことは，多様な他者を受け入れ，考え方の違いをも理解し合う人間関係へとつながっている。

各教科等の学習において本質として見方・考え方の創出と受容，転移を促したことによる効果である。単元内または単元を超えて見方・考え方を自覚的に働かせる子供の姿が多く見られた。この積み重ねが子供の学び方の変容につながっている。単元や単元を超えて「同じことをしている」ということに気付く子供が増えたのである。これは教科・領域を超えて見られた。つまり，「学び方が分かる」子供が増えたということである。また，見方・考え方を学習の中心に据えると，授業で学力差が見られにくくなるというよさもあった。学習内容をどれだけ知っているかということよりも，見方・考え方は何か，よさは何か，どのように活用可能かということを授業では求めるため，知識量がそれほど重視されなくなったからではないだろうか。学習に苦手意識を感じている子供も授業に積極的に参加する姿が見られるようになった。以上のように見方・考え方の創出と受容，転移を促すことは，学び方の変容，学力差の解消，学ぶことを楽しむ子供を育むことに効果があったと言える。

次に，教師にとっての効果である。創る科の学習を行うに当たっては，価値の内容や価値同士の関連，有用性等について把握することが大切である。価値について様々な文献や先行研究を基に探り，実践を積み重ねることで，価値の構造が見えてきた。例えば，本校で扱う８つの価値の根底には比較する力があるといったことがその一つである。そして，価値と社会とのつながりを考えるようになった。本校で定めた価値は汎用性のある力であるため，学習場面だけでなく，実生活，今後の社会を見据えたときにも必要なものである。どのような学習者を育てたいのか，我々の育てたい子供像は何かを明確にもって日々の教育活動に当たることができるようになったのである。また，見方・考え方を本質とした授業づくりを行うことで，教材理解が深まった。教材理解が深まることによって得られる利点は多くあるため，以下にまとめて示す。

○学習内容の系統性を見方・考え方を視点として，見ることができるようになった。
○質を上げながらも教材研究の時間を削減することができた。発問パターンや板書等の指導方法の確立につながった。
○教材を捉える視点が増えた。
○学習内容に縛られることなく，指導方法にバリエーションが出たり，指導内容に軽重をつけながら授業を行ったりすることができるようになった。

以上のことから，教科理解の深まりが各教科等の学習の質の向上につながり，必然的に子供の学びを加速させ，時数の削減にもつながった。つまり，教師自身にとって授業の仕方や考え方の変容に効果があったと言える。

最後に保護者に対する効果である。令和４年度に保護者を対象に実施した創る科のアンケート（質問項目：「創る科」の学習は意義があると思うか）の結果を以下の表３に示す。

表３　保護者アンケートの結果

	そう思う	どちらかといえばそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	わからない	無回答
１年	65.2%	30.4%	0.0%	0.0%	4.4%	0.0%
２年	50.0%	39.0%	1.6%	0.0%	7.8%	1.6%
３年	47.6%	42.9%	1.6%	1.6%	6.3%	0.0%
４年	61.7%	31.7%	0.0%	0.0%	5.0%	1.6%
５年	43.3%	46.2%	1.5%	0.0%	9.0%	0.0%
６年	38.1%	47.7%	1.6%	0.0%	11.0%	1.6%
全学年	51.0%	39.7%	1.1%	0.3%	7.3%	0.8%

肯定的な回答が多く見られるなど，多くの保護者が「創る科」の学習の意義をそれぞれに感じていることが分かる。「そう思う」と回答した理由を二つ紹介する。

○企業向けの研修においても「課題解決スキル」などをテーマにしており，問題を見出す力の授業は，正に同様の学習だった。社会人になって行うような学びに小学生で触れる機会があることはすばらしくありがたい環境だと思う。
○他の学校の授業時間が延びる中この時間内でできることが良いと思います。教科により重複する部分も多いかと思うので効率的に進めれば，この科目は何のために勉強するのかもより理解しやすいのではないでしょうか。

創る科の意義やLess is moreの実現に対して客観的な立場から一定の評価を受けている。

（２）実施上の問題点と今後の課題

本校の研究では，見方・考え方を授業づくりの中心に据えている。子供が見方・考え方を自在に使いこなすことができるように，言語化の過程を大切にしている。その結果，音楽科や体

育科等の芸術的教科においては，見方・考え方を言語化させるために多くの時間が費やされ，活動量とのバランスをとる難しさから，技能の習熟が課題となった。各教科等の学習だけでなく，「創る科」と「各教科等の学習」がどの程度直接的に融合しているのか，子供の姿では見られることが増えたものの，数値的な根拠を基に証明できていない。「見方・考え方」や「価値」を系統的に指導するためには，積み重ねが重要である。そのためには，教師のより強い連携や複数年指導できるような体制が必要である。同時に，教科融合カリキュラムの不断の見直しと運用等，カリキュラム・マネジメントを継続的に行うことで，学校全体で子供の学びを支えることも欠かすことができない。以上のような課題から，「少なく教えて豊かに学ぶこと」を持続的に行うためには，教科融合をキーワードに，教師の個々の授業力向上や連携が必須となることが言える。私たちの研究が今後の社会を生き抜く子供の資質・能力を育むことに寄与する取組であると考え，一層研究に邁進したい。

本研究の実施に当たって，子供が少ない時数で豊かに学ぶことができるようにしたい。そのためには，子供が価値や各教科等の本質（見方・考え方）を学習場面や生活場面において自在に使いこなすことができる資質・能力が必要であると考えている。つまり，子供が価値や本質（見方・考え方）を自覚して自発的に使えるようにすることこそが，本研究の核になる。本研究の概要図を以下（図）に示す。

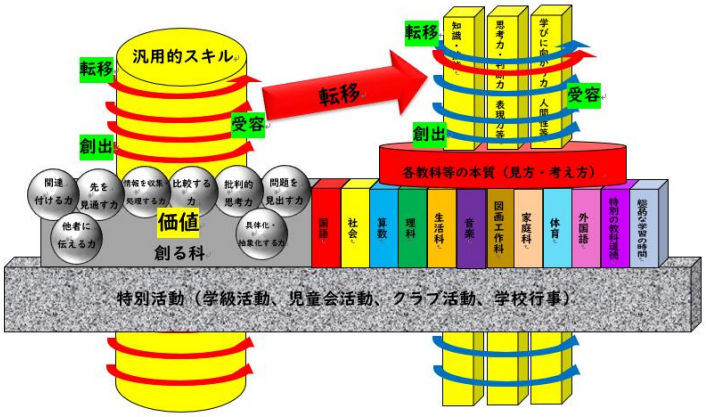

図　令和４年度　研究概要図

各教科等の学習では，各教科等の本質（見方・考え方）の創出と受容，転移を促すことによって，３つの資質・能力（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）を育む。新たな教科として創設した「創る科」の学習では，価値の創出と受容，転移を促すことによって，「汎用的スキル」を育む。「汎用的スキル」を育むことは，各教科等の学びを促進させると考える。なお，「汎用的スキル」の定義は「価値を各教科等の学習の中で使いこなし，日常生活の中に生かしていく能力」である。

本校は，学習過程として，創出，受容，転移を位置付けている。各過程の定義を以下に示す。

「創出」…無自覚ではあるが，本質（見方・考え方）や価値を生み出したり，示された本質（見方・考え方）や価値について考えたりする過程
「受容」…無自覚であった本質（見方・考え方）や価値を自覚的に捉えていく過程
「転移」…①受容した本質（見方・考え方）や価値を他の文脈や場面においても活用できるのかを考えたり実践したりする過程
②「創る科」の学習で創出と受容，転移した価値を各教科等の学習に活用できるのかを考えたり実践したりする過程

単元をとおして創出，受容，転移の過程を位置付けることで，子供が無自覚である本質（見方・考え方）や価値を自覚的に捉え，他の文脈や場面においても活用していくことができるようにしたいと考えている。これらの定義を踏まえ，授業実践を積み重ね，各過程の支援を分析した結果，次のとおり支援の傾向があることが分かってきた。以下，表に各過程の主な支援について示す。

表　創出と受容，転移の主な支援

過程	主な支援
創出	・単元において子供が繰り返し働かせる価値や本質（見方・考え方）を設定し，単元を構成する。 ・価値や本質（見方・考え方）に着目できるように，教材提示の仕方を工夫する。 ・価値や本質（見方・考え方）に着目できるように，教材との出合いの文脈を工夫する。
受容	・子供の様々な考えや発言を認める。 ・子供自身や仲間の言動に対して，その理由や意図，思いについて問い返す。 ・仲間の発言に対して再現を促す。 ・単元や１単位時間ごとに価値や本質（見方・考え方）の振り返りを促す。
転移	・価値や本質（見方・考え方）を活用する場面を設定する。 ・価値や本質（見方・考え方）を活用できそうな場合を考えるよう促す。 ・課題と照らし合わせて活用できそうなことを問う。 ・価値や本質（見方・考え方）を活用せざるを得ない状況や場を設定する。

【別添１】－別紙２

山口大学教育学部附属山口小学校　教育課程表（令和４年度）

	各教科の授業時数										特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	**新設教科**	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語						
第１学年	**255** **(−51)**		136		102	68	68		102		34	**17** **(+17)**		34	**34** **(+34)**	850
第２学年	**263** **(−52)**		175		105	70	70		105		35	**18** **(+18)**		35	**35** **(+35)**	**911** **(+1)**
第３学年	**193** **(−52)**	70	175	**88** **(−2)**		**53** **(−7)**	**53** **(−7)**		105		35	35	70	35	**35** **(+35)**	**947** **(−33)**
第４学年	**201** **(−44)**	**88** **(−2)**	175	**88** **(−17)**		**53** **(−7)**	**53** **(−7)**		105		35	35	**53** **(−17)**	**26** **(−9)**	**35** **(+35)**	**947** **(−68)**
第５学年	**158** **(−17)**	**88** **(−12)**	175	**88** **(−17)**		**53** **(+3)**	**53** **(+3)**	**53** **(−7)**	**70** **(−20)**	70	35		**61** **(−9)**	**18** **(−17)**	**26** **(+26)**	**948** **(−67)**
第６学年	175	**88** **(−17)**	**140** **(−35)**	**88** **(−17)**		**53** **(+3)**	**53** **(+3)**	**53** **(−2)**	**85** **(−2)**	70	35		**61** **(−9)**	**18** **(−17)**	**26** **(+26)**	**948** **(−67)**
計	**1245** **(−216)**	**334** **(−31)**	**976** **(−35)**	**352** **(−53)**	207	**350** **(−8)**	**350** **(−8)**	**106** **(−9)**	**575** **(−22)**	140	209	**105** **(+35)**	**245** **(−35)**	**166** **(−43)**	**191** **(+191)**	**5551** **(−234)**

※ 授業時数，単位数の増減等については，表中に記号を付けたりゴシック体で示すなど，教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

【別添１】－別紙３

学校等の概要

１　学校名，校長名

学校名　　山口大学教育学部附属山口小学校（やまぐちだいがくきょういくがくぶふぞくやまぐちしょうがっこう）

校長名　　吉鶴（よしつる）　修（おさむ）

２　所在地，電話番号，ＦＡＸ番号

所在地　　山口県山口市白石３丁目１－１
電　話　　０８３－９３３－５９５０
ＦＡＸ　　０８３－９３３－５９５１

３　学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数，学級数

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
70	2	68	2	66	2	65	2	67	2	67	2	403	12

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			15	1	1		1	4

ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	2	1	29

５　研究歴

昭和５３年　文部省指定　小学校教育課程「特別活動」
平成２年　　文部省指定　学校週５日制